

広報広聴委員会行政視察報告

日程：令和8年2月2日（月）

視察先：滋賀県彦根市

参加者：小池委員長、向井副委員長、上岡委員、木村委員、山田委員、下向委員、中曽委員、
大下委員、片山委員、景山委員、事務局随行2名

●滋賀県彦根市

【視察事項】子ども議会等、市議会の広報広聴の取組みについて

1 視察概要

東広島市議会においては、平成25年に議会基本条例を制定し、それまでの広報広聴のあり方を見直す中で議会会報委員会を広報広聴委員会に改編し、議会広報紙の見直しはもとより、新たに議会報告会や市民との意見交換会に取り組んでいる。



このような中、広報広聴活動の更なる充実を図るため、令和4年度に「市議会広報広聴に関する市民アンケート」を実施し、その中で浮かび上がった課題として「若年層の市議会の認知度が低い」ことがあり、今年度策定した「東広島市議会広報広聴ビジョン」の取組方針として「若い世代に政治に関心を持っていただける取組みの実施」を掲げている。議会報告会の会場として市内に立地する3大学を会場とし、大学生に参加いただくなど、若年層への認知度向上について取り組んでいるが、さらなる取組みの必要性を認識している。

彦根市議会では子ども議会を通じて若い世代に議会を知っていただく取組みを先進的に実施されており、これらについて視察した。

2 彦根市議会の取組み

(1) 議会改革

彦根市議会では、平成24年の市民アンケート結果（市議会への関心の低さ、市民との対話不足、議員活動の不透明さ等）を受け、「分かりやすい議会」を目指して議会改革を進めてきた。平成19年には議会改革特別委員会を設置している。

広報広聴における改革として、全議員が参画する3つの委員会（議場解放促進委員会、広報委員会、広聴委員会）を設置した。議場解放促進委員会は議場コンサート、子ども議会、中学生・高校生・大学生の傍聴を、広報委員会は市議会だよりや市議会ホームページを、広聴委員会は議会報告会を担っている。

(2) 子ども議会

●概要

平成20年度から実施している。年1回開催し、今年度で16回目を数える。市内17小学校の6年生から最大24人を選出し、政治への関心と社会参画意識の醸成、保護者へ市政を身近に感じてもらうことを目的として実施している。市議会・教育委員会・市執行部の三者共催で運営している。

●事前研修会

平成26年度から教員負担軽減のため導入。質問づくりの指導、質問内容の整理、担当課へのヒアリング同行など、議会側が積極的に支援。質問作成後は市が答弁担当部署を調整し、実際の議会と同様に市長らが答弁する。



質問書作成の様子（彦根市議会HPより）

●リハーサル

本番1週間前に実施し、議席・議長の決定、挙手・発言の所作指導などを行う。議員がデモンストレーションを行い、子どもの不安軽減に努めている。

●本番

9時半に開会し、3グループに分かれて進行する。一般質問形式で、持ち時間は1人5分。保護者や教職員、一般市民の傍聴も多く、満席になる年もある。終了後はDVDに記録し児童に配付している。子ども議員経験者が市職員となり「子ども議会が市政への関心の契機となった」と述べる例もあり、効果が確認されている。一方で、少子化や学校行事の多様化による参加者確保の課題があったため、参加イメージを伝える動画を作成し、子ども議会の「見える化」を図り、学校での周知を強化した結果、参加希望者が増加した。



質問をする子ども議員（彦根市議会HPより）

(3) 議会報告会

平成26年から実施しており、形式は対面・ワークショップ・オンラインなど、その時々
の状況で柔軟に変更している。

令和4年度は『出張!!議会広聴の日』として彦根ゆかたまつりの中でアンケートに回答
いただく形で開催した。子育て世代の参加が多く、彦根市に望むものとして「子育て支援の
拡大」が上位に挙がった。彦根駅前のショッピングセンターでの実施時はアンケートやクイ
ズを交えて開催し、意見交換にも参加いただいた。

令和5年度は滋賀大学との「哲学対話」に参加し、若者の意見を把握する取組みを実施し
た。

令和6年度は公民館に議員が出向き、市民と自由に対話する方式を実施したほか、彦根ゆ
かたまつりの中でアンケート形式で実施した。

令和7年度には議会だよりにQRコード付きアンケートを掲載し、市民ニーズの把握に努
めている。

令和8年1月には「議会広聴の日」として市役所で対話会を開催した。今後の課題整理と改
善に繋げる予定である。



令和4年度 ショッピングセンターでの『出張!!議会広聴の日』(彦根市議会HPより)



令和4年度 彦根ゆかたまつりでの『出張!!議会広聴の日』(彦根市議会HPより)



令和5年度 滋賀大学での「哲学対話」（彦根市議会HPより）



令和6年度 市内公民館での議会報告会の様子（彦根市議会HPより）



令和7年度 市役所1階市民ホールでの『議会広聴の日』（彦根市議会HPより）

3 質疑応答

(1) 組織体制について

- Q 議場開放促進委員会、広報委員会、広聴委員会が3つに分かれている理由について。
- A 議会基本条例の制定にあたり、広報広聴の機能強化ということで議会改革の中で3委員会を組織しようとなった。議員定数が24名であり、全員が8人ずつに分かれて各委員会に所属している。
- Q 3委員会の日程、連絡調整など、事務局に負荷がかかるのではないか。
- A 正副の担当が2名ずつ各委員会を担当している。議場開放促進委員会は夏から秋にかけて繁忙だが他の時期はそうでもない。広報委員会は議会だよりの作成を行っているので平均して作業がある。広聴委員会は議会報告会を担当している。それぞれの繁忙時期が異なっており、委員会運営の補助が可能な事務量となっている。

(2) 子ども議会について

- Q こども議員は事前研修を受けた後、ある程度案を持って打ち合わせに来られるのか。
- A 担当議員と教員でまとめ上げることとしているが、事前に授業の中で実施される学校もあると聞いている。今年は再質問が多かったのは事前に準備をされている方が多かったのではないか。
- Q 負担について教育委員会からクレームはないのか。
- A 子ども議員一人につき教育委員会の指導主事が一人対応する。教育委員会の負担が無いわけではないが、何回か実施していく中で子ども議員の質問テーマが同じ複数の生徒を同じ先生が担当する体制を学校で組んでいただいております。負担感の軽減を図られている。議員側も自分が力を入れているテーマ、得意なテーマの子ども議員を担当している。

(3) 議会報告会について

- Q 議会報告会について、最初はイベントに出て行って様々な方の話を聴かれる中でやや偏りがあり、いろいろ検討されて小規模になったのかと推察するが、今後はどのような形とされたいのか。
- A 議会報告会のありようは幾度か変遷があり、商工会議所などの大規模な会場で開催したこともあるがコロナ禍を経て少人数でゆっくりお話しを伺う意見交換窓口を設けて実施している。令和4年は彦根城近くの浴衣祭りの会場に向いてシールアンケートをとって議員と話をさせていただく「出張！議会広聴の日」として開催した。

4 委員の所感等

(1) 組織体制について

- ・議会改革の取組みとして議会開放促進委員会・広報委員会・広聴委員会の3つの委員会を設置しており、またそれを調整するために、正副議長と各委員会委員長で構成される「広報広聴調整会議」が設置されている。議員全員が議会活動を市民に理解してもらうために取り組んでいる点が興味深い。
- ・視察対応を議員自らが行っている点は参考になる一方で、本市において同様の対応を実施することは難しい場面が多いのではないかと感じた。その理由として、毎月の常任委員会の開催により議員のスケジュール調整が容易でないこと、さらに視察内容に対して議員全員の認識を統一しておく必要があることなど、運用面での負担が大きい点が挙げられる。
- ・広報広聴を3部会に分け、議会全体で取り組んでいる姿勢に感銘を受けた。
- ・彦根市においては議場開放促進、広報、及び広聴委員会の3委員会それぞれ担当が分かれ、ほぼ全議員が関わっている。本市では広報広聴ビジョンの下、SNS等従来の取組みが広がっていくことを考えれば、彦根方式をとるかは別として、部会方式及びワーキング方式により役割分担を行う必要があると感じた。

(2) 子ども議会について

- ・子ども議会は教員や事務局に負担がかかるのではという懸念があったが、過去の経験から改善を重ねられ、8人×3チーム編成で1人当たり質問と答弁合わせて5分ということで、教員や事務局に負担をかけずに「子ども議会」を開催されている。本市議会でも彦根市を参考にすれば実施可能という印象を受けた。また、子どもたちの要望や意見を政策として市政に反映させることが目的ではなくあくまでも議会に興味を持ってもらう機会とされ、子ども議会が開催されることにより、教員や保護者が議会に足を運んでもらえることも相乗的に効果を発揮している。本市で実施するとしたら目的を明確に設定すべき。
- ・子ども議会は、子どもたちが市政や議会について考え、自分の意見を伝えることができる貴重な機会であり、今年度は再質問も行われるなど、踏み込んだ質問が多く内容の充実した議会となったと伺い、とても意義のある取組みだと感じた。また、多くの保護者や家族が参観されたことは、市議会が当初目指していた目的は十分に達成されているように思われた。また、少子化や子どもたちを取り巻く環境の変化に対する懸念がある中、紹介動画の作成により参加希望者が増えたことは、子ども議会の魅力が分かりやすく伝わった成果だと考えられる。今後も工夫を重ねながら、子どもたちの学びや関心につながる取組みとして継続されることが期待されます。本市において、大変参考となる事例である一方、各関係者の役割分担や負担の分散についても、課題として検討していく必要があると感じた。
- ・彦根市では、子ども議회를年1回継続して開催し、事前研修会の実施など、関係機関の負担軽減を図りながら運営されている点が印象的であった。一方で、負担軽減の工夫を行っているものの、関係機関の実務面では一定の負担が生じていることも事実であり、継続的に実施していくうえでの運営体制や実施頻度については、今後も検討を重ねていく必要があると感じた。

じた。また、関係機関が本来担うべき実務や他の政策課題との優先順位を踏まえ、実施方法や頻度を固定的に捉えるのではなく、目的や相乗効果等を検証しながら柔軟に見直していく視点も重要であるとする。

- ・市内全ての小学校から質問する児童を選任し、質問内容を検討・組み立てる過程では、教員の負担が大きくなっている面もあると感じた。しかしその一方で、子どもたち自身が課題を見つけ、より良い質問にしようとする主体的に取り組む姿勢は大変頼もしく、教育的にも大きな意義があると感じた。また、学校向けに作成された子ども議会紹介動画は、議会の流れや雰囲気具体的にイメージしやすく、児童本人だけでなく保護者の理解促進にもつながる有効な手法だと感じた。事前に動画で概要をつかめることで、子どもたちがより積極的に議会に参加できる環境づくりにも寄与しているとする。
- ・彦根市の子ども議会は、市議会と教育委員会の共催で実施されており、本番当日は、児童関係者も多く傍聴に来るなど、議場開放と主催者教育を両立させた意義ある取組みだと感じた。市内小学校から各2名、最大24名が参加し、事前アンケートで関心テーマを把握したうえで、8月の研修、11月のリハーサル、本番へと段階的に準備が進められている点が特に印象的だった。質問作成には教育委員会と議員が関わり、再質問や答弁を含めて1人5分という設定も、子どもが無理なく挑戦できる工夫だと感じた。また、参加経験者が後に市職員として入職した事例もあると聞き、市政への関心を育てる入口として実効性のある事業だと実感した。ただ、本番は24名で、8名ずつ5分の3グループで、午前のみとなると、時間的にタイトだと感じた。
- ・視察前は、子ども議会の実施にあたり、教育委員会や学校現場、教員をはじめとする執行部側の準備負担が過度にならないかという懸念が大きかった。しかし彦根市では、質問時間を短くするなど運営面の工夫により、関係者の負担感を一定程度抑えながら実施している様子が見え、その懸念はある程度払拭された。また、子ども議会を通じて参加児童生徒のみならず、その家族にも議会活動が伝わり、議会への理解促進につながるという波及効果が期待できる点を改めて認識した。実施にあたっては調整や準備など一定のハードルはあるものの、子ども議会のような取組みは、市民にとってより身近で開かれた議会の実現に資する有効な手段になり得ると感じる。
- ・子ども議会の取組みに関しては、議会及び議会事務局の主体的参画が見て取れた。本市においても過去子ども議会が開催されたが、質問作成等に関して教育委員会の負担が大きすぎる部分があったと聞き及んでいる。議会主体の取組みを構築していくことの必要性を感じた。過去の子ども議会において質問のテーマが直接市の施策及び事業につながった事例は少ないが、ヒントになったことは多かったと聞き及んでいる。個人的には新幹線の彦根新駅新設案や市の直接の事業ではないにせよ人口動態及び交通政策上も興味深い質問も過去にあったと記憶している。本市議会でも質問を政策提言に結び付ける取組みが行われているが、それに加え政策の種として子ども議会での質問を一般質問へ、それから政策に反映できる流れが構築できればよいと感じた。

(3) 議会報告会について

- ・議会報告会の課題は、本市と同様に参加者数の少なさや参加者の偏り、特定の年齢層に限られている点で共通していた。一方で、本市では開催時間の見直しや、若者の参加を促すため大学を会場とするなどの工夫が行われており、参加促進に向けた取組みを進めている。また、アンケートも実施されていたが、寄せられた後ろ向きな意見も改善に向けた材料として捉え、一度きりで終わらせず継続的に実施していく姿勢は参考にすべき点であると評価したい。
- ・市議会の広報広聴の取組みについて、ワークショップ形式の意見交換や、イベント時にシールアンケートを実施するなど、多様な手法を積極的に取り入れ、市民の声を身近に、丁寧に拾い上げようとする姿勢が非常に印象的であった。議会報告会における参加者層の偏りや参加人数の少なさといった課題に対し、継続的なアンケート調査を通じて市民ニーズを把握しようとする取組みは、本委員会としても参考にし、導入を検討すべき点だと感じた。また、令和7年度には市役所において担当制で時間を区切り、市民の意見を聞く方式を採用したとのことである。しかし、本市で同様の取組みを行う場合、市域が広いことに加え、市役所までの移動手段に制約のある市民も多いことから、議員が各町へ積極的に出向き、直接意見を伺う形が望ましいと考える。さらに、可能であれば中学校や高等学校にも足を運び、例えば「探究の時間」などを活用して意見交換を行うことで、若い世代の主権者意識の向上にもつながるのではないかと感じた。将来の市政を担う世代に議会活動への理解を深めてもらう一つの機会としても有意義だと考える。
- ・彦根市議会では、広報広聴機能の強化のため、全議員が参画する3つの委員会（議場開放促進委員会、広報委員会、広聴委員会）を設置している。本視察では特に議会報告会の多様な展開手法に着目した。

■特徴的な取組み

イベントへの出張型広聴活動

「ゆかたまつり」や「彦根えびす講」などの市民イベントに議員が出向き、シールアンケートを実施。議員も市議会の浴衣を着用し、イベントの雰囲気になじむ工夫をしている。令和4年・6年の「ゆかたまつり」では約650名から回答を得た。

ターゲットに応じた規模・形式の変更

大規模なワークショップ形式からコロナ禍のオンライン形式、そして令和7年度は本庁舎市民ホールでの小規模対話形式へと変遷。1組20分の対話形式で、1日10組程度に対応し、じっくりと市民の声を聞く体制に転換している。

■継続的な試行錯誤

「誰に」「何を目的に」するかを毎回検討し、その時の課題に応じて手法を変化させている。参加者の偏りや参加者数の少なさといった課題に対し、周知方法や対象設定を柔軟に見直している。

- ・東広島市では4つの常任委員会ごとに議会報告会を開催しているが、彦根市のように形式を固定せず、市民のニーズや反応を見ながら柔軟に変化させる姿勢は参考になる。特に印象的だったのは、「議会報告会」という堅い枠組みにとらわれず、市民が集まる場所に議会側から出向いていく発想である。イベント参加者という「議会に関心がない層」にもアプローチす

ることで、潜在的な市民の声を拾い上げる可能性が広がる。その一方で、イベント参加者には年齢層などの偏りがあり、同じイベントで繰り返し実施することで傾向を把握する必要がある点も学んだ。